てくれる。私はしみじみと機械文明と精神文化のアンバランスを感じたのである。あの人たちにも幼い時から良心的な態度が正常に育っていたら、もっと明るい世の中になっているのではないか知ら。あんな大きなおとなを相手に、いくら社会教育の中で道徳を叫んで見ても中からにじみ出るような態度なんて絶望ではなかろうか。もう戦後ではない。世の中も落ちつきを取りもどしているはずである。そうして見るとわれわれ教育者の責任に負うところが大きいと思う。

（広島大学教育学部付属幼稚園）

よい気持で暮す子ども

大熊米子

家庭における幼児期の道徳教育の、すべての根本は、限りない母親の愛情であり、温かに、おちついた、いうにいわれぬ家庭の雰囲気であると思う。愛情豊かな、よい環境の中で、いつも気持よい生活をする子どもたちは、かならず身心ともに正常な発達をして、よい習慣を身につけ、ことにあたっては、正しい判断力が培われることであろう。

隣の部屋の赤ん坊の泣き声は、だんだん吸込まれるように間延びがしてきて、固唾をのむ思いでいる私が、ほっと肩の力を抜くと、またそれを合図のように、ひとしきり盛り返して、あわれに、悲しげに聞えてくるのだった。

「あら、あなた、いないのかと思ったら……かわいそうに、赤ちゃん泣いてるじゃないの」

いままで洗濯をしていたらしい手を拭き拭き、母がびっくりしたような顔を出した。「はじめが大事だから一人で寝る癖をつけようと思って我慢していたの」私のことばを聞き流して、母は急いで赤ん坊のベッドのところへ行って、静かにあやしはじめたので、私も救われた思いで、その後からついていった。

『おなかがいっぱいで、おむつがきれいなら、赤ん坊は一人で眠るべきだ』と、どの育児の本にも書いてあった。『自立の精神は、そうして習慣づけられなければならない』……と

はじめて母になった私は、後生大事と育児の本を信仰していた。……間もなく赤ん坊は、すやすや眠ってしまった。そして母は云うのだった。

「私はね、赤ちゃんが一人で寝ることができるようにならすよりも、満ちたりて、母親の笑顔をみながら、温い、いい気持で眠る方がいいと思うのよ、あなたも、そうして育てて来たのだけれど……きれいな気持で寝れば、きれいな気持で起きるし、いつもきれいな気持でいれば優しい子になりますよ、きっと……反対に、いつも淋しい気持でいたら、冷たい子になるかもしれないわ。」……それで私は、はっと思いあたった。私はずいぶん大きくなるまで、やすむときは必ず母が寝床まで送って来て、「いい

お夢をごらんなさい』と言って、ふとんの肩のあたりをたたいてくれたものだった。すると私は、本当に素直な気持で、いつもきまって瞼の裏に、色とりどりの何かの花が、一面に咲いているところを思い浮べて眠るのがくせだった。あのいい気持!!「本当！　思い出したわ」私が優しい気持の子に育ったかどうかは別として、とにかく、あんなによい思い出は、どの子にも持たせてやりたい、それから、次々と三人恵まれたわが子が、いつでも温かな、よい気持で過せるようにとのみ、私は願っている。幼い日の思い出を懐しむときが、人の心が一番素直になるときかもしれない。

長女が物心づいて、長男が生れた頃は、戦後の、極度に食料の不自由な頃だった。それでも、小さい子供のいる家には、どこからか折々は、お菓子らしいものが現われるのだった。「はい、これはのんのんちゃま(仏様)、はい、そのつぎがおじいちゃま、おばばちゃまもお手々を出して、はい」長女のM子が、おしゃまなことを云いながら分けたり、やっといざり歩きのできるようになった長男のIが、手から手へ、あめなどをのせてまわる、楽しいひとときがあった。乏しければ乏しいで、またかえって面白かった。いあわせた人は……いや、仏様まで御同席で、一つの雰囲気で、一つの味わいを楽しんだ。一体、ものを食べるということは、人間のいちばん動物的な本能的な面であるが、それだけに、幼い子どもにとっては、一番身近な切実なことである。だから、子どもの食生活を、美しく楽しく扱って、それを通して、和やかに豊かな家庭の雰囲気が、子どもの全身から滲みこんでいくように導くことは、母親の楽しい工夫である。

戦災を受けて、郊外にささやかな家をみつけて移り住んだとき、庭つづきの隣家とは、境の垣根がなかった。回覧板のこともあり、これまでの家と違って、その交渉は密接らしかった。

ところで、このお隣りには、七つ　三つ一つと三人お子さんがあって、今まで一人っ子どうように育ってきた四歳のM子は、お友だちが出来そうな気配に、おおいに喜んでいた。あるとき、何かのついでに私は「奥様、へんなことを伺いますけれど、奥様は子どものけんかなどお気になさいます?」と言うと「いいえ　とんでもありませんわ、三人もおりましたら、けんかを気にしていてはお食事のしたくもできませんわ。」との返事。早速二人は意気投合して、「……それでは境の垣根は、このまま作らないでおいたら子どもがひろびろと遊べますわね、そして、両方の親は、自分の見える限りのところにいる子どもは、どちらの子どもでも、教えたり叱ったり、自分の子どもとおなじにいたしましょう、……そうすればおたがいに安心ですもの」という、たいへんな約束をまことにあっさりとり交してしまった。いま考えるとおかしいような、あまりにもざっくばらんな相談だが、本当によい事をした。以来十二年、お隣は五人、こちらが三人、子どもの数がふえたことだけが変化で、いまだに垣根のない交わりを結んでいる。

昔は、〝朱に交れば赤くなる〟式で、悪いことや、不合理から、自分の子どもだけを守ろうとする親もあった。「○○さんは悪いから遊んではいけません」という工合に、自

分の子どもにだけ声をひそめて言って、○○さんの親にはいっこう知らぬ顔をしている。それではいけないと思う。悪いこと、不合理なことは、皆で見つけて、皆でなおしてそして皆でおたがいに高めあうところまで行かなければならない。そんな意味から、ほんの片隅の試みとして、垣根のない共同管理は、いまでもよかったと思っている。

「お母ちゃま　何か小さい瓶二つちょうだい、同じ形のをね」「お母ちゃま、さっきのビスケットまだある？」「お母ちゃま灰をほんの少しちょうだい」「お母ちゃま、百日草の小さいの、切ってもいいでしょう？」「お母ちゃま、お線香二本ちょうだい」……何だか、さっきから忙しそうに働いて居たIとK子、何を始めたのかと思ったら、「お線香ちょうだい」で思いあたった。このあいだから、からだに白いかびのようなものがついて、マーキュロや、唐がらしや塩や、いろいろな水に入れて手当をしたかいもなく、けさ金魚が一匹とうとう死んでしまったのだった。IとK子は、たいそう力をあわせて、わが家の庭の中の一等地、目抜きの場所にたいへん立派なお墓をこしらえた。乞われるままに、私もまじめな顔をしておまいりした。私としても、昨日までいじらしく美しい尾ひれをひるがえしていた金魚をいたむ気持は本当だったし、子どもたちが、自分たちだけの、純粋な思いやりの気持で一生懸命にお墓を作って拝むということがとてもうれしかった。何かに手をあわせて拝むへりくだった気持、金魚だってよい。まい朝母親が仏壇を拝む気持より、あるいはもっと真実で純粋かもしれない。私は、はじめあまり子供らしく立派にできたお墓を見たとき、ちょっと笑いだしそうになったが、後になって、笑わないでよかったと、つくづく思ったことだった。そして、しばしば参詣の仲間に加わった。

「忘れものは無いの？」「紙は？」「ハンケチも？」「定期はありますか？」「傘はいらないかしら？」そしてさいごに、「よーく気をつけてね、右を見てから左を見るのよ……じゃあ行っていらっしゃい」

M子が一人で通学するようになったころから、もう十年、私は毎朝おなじことを言う。そして、いっしょに玄関を出て門のところで、姿が見えなくなるまで見送って、その最後の瞬間におたがいにバイバイの気持で手を振る。このごろは十五分位の間に、三人のこどもが別々に行くので、見送りもなかなか忙しい。でも、すっかり習慣になってしまうと、おたがいに朝のこのふれ合いのひとときは、欠かすことの出来ないものである。何かのことで、手をふりあえなかった日は、何となく一日中不安なのである。反対に、時間も充分あって、ゆっくり見送れた日の心は、ほんとうに安定している。これでいい、これで、また帰ってくるまでお互の気持はつながっている……そんな気がするのだ、いつか　M子がまだ小学校の四、五年のとき、このことを作文に書いた。「お母様が手を振って下さると、私はとてもうれしくなって、元気に歩き出します。」と、そんな文だったが、子どもの方でも、こちらの気持をそんな風にうけとっているのかと、たいへんうれしかったものだ。朝のふれあいは、多分一日中、よい子でいてくれる心のかてになるのだろう。

私はこどもたちが大きくなってしまってもこの習慣はやめることは考えられない。

道徳教育といっても、幼いころ、こどもがまだ家庭を生活の本拠としているころは、ほんの下地を整えることしか出来ない。でも、次々とよい心が芽ふくような、立派な下地を整えることは、母親の仕事の中で、一番崇高で、永遠の楽しみでもある。そしてその根本は、えいちにあふれた、かぎりない母の愛情である。（母親）

中学生の生活指導

内田安久

小学校時代は素直ないい子だったのに、中学生になったらだんだんいけなくなってきた。いうことはきかず、口答えはする。妙な理屈をならべて逆にくってかかる。しかもすることはしない。そうかと思うと、すぐにふくれてふてくさり、口もきかないでソッポを向く。それをこちらから強く出ると、どんな無茶をも平気でやってしまう。

「いったいどうしたらいいんでしょう。これが新しい自由教育というものなのですか。」という親の声をしばしば聞く。

これは家庭内ばかりのことではない。悩みは学校内にも山ほどある。物はこわれる。規則はまもられない。開襟シャツをだらしなくズボンの外にはみださせてアロハのようにして着ているので注意をすると「この方が涼しくて衛生的です。学校ではなぜ合理的な生活をさせてはくれないのですか。」と逆襲する。かまわないでおけば放縦になるし、締めると人権尊重にもとると叫ぶ。むずかしいのは中学時代のとり扱い方である。

もう単なる子どもではないので、力づくだけでは押しにくい。ばあいによると腕力ではかえって子どもの方に利のあることもあり得る。それにこのころはひじょうに感情もたかぶりやすいので、あまりこちらが強くでると、乱暴したり家出したり、ときには自殺もやりかねない。そうかと思うと先方でチャンと心得ていて、こちらの裏をかくものもいる。叱られそうになると先まわりしてあやまったり、中には「そんなに叱らないでおいて下さい。いまはちょうど反抗期なんだから、叱られれば叱られるほど反抗したくなるんだ。放っておけば、いまによくなりますよ。」と逆説法する早熟型さえある。よほどシッカリしていないと先生もあぶない。

こうした状態にあるものを、じゅうらいの修身のようないき方で教育しようとしても、うまくいかないのは当然であろう。社会が悪いのだ、社会に責任がある。だからまず社会をよくしてかからなければという人もある。たしかに一面の真理はある。いかに家庭や学校でやっきとなって努力しても、世間一般が絶えず悪い影響をおよぼしているのでは焼石に水である。しかしそうかといって、まず家庭や学校でその教育に